

## 風巻景次郎略伝

風巻 春子

生い立ち

昭和八年一月大阪女専時代



明治三十五年五月二十二日兵庫県川辺郡神崎村字常光寺に生れる。父は平田景儀（慶応元年生）母里（元治元年生）の五男で、他に三女があった。両親ともに伊達藩士で、母里の祖母は林子平の妹である。翌三十六年八月三日入籍し、京都市上京区武者小路室町十二番地風巻平妻舞免の養子となる。風巻平は實母里の次弟で、舞免も同じく伊達藩家老の長女である。風巻平は、中央大学中退、当時は横浜火災

保険会社京都支店長であった。

### 幼少期

明治四十一年六才の頃、父は金沢支店長となり、金沢市高岡町に住む。その頃のこととは、大阪府女子専門学校「文芸道場（八号か）に「雲」という小説にかいてある。四十二年四月に金沢市西町小学校に入學。父の転勤で大阪に移る。大阪府東成郡天王寺村大字阿部野村立天王寺尋常高等小学校に転校する。（現在晴明ヶ丘小学校である）家は西成郡玉出町一〇七二（現在西成区千本通二丁目六一）に住み、そこで六年一学期まで過ごす。幼友達に恵まれ、後年大阪女専赴任後旧交をあたため一生涯交友をつづけていたのは、森木一郎、山本和雄、画家の橋本治郎、東京の小谷邦夫、北海道の吉岡潔、ニッカウイスキー四方山徑氏等である。大正三年九月、父名古屋支店長となる。名古屋東区白壁町に住む。家のむかひに、後の平林治徳氏秋子夫人の家があった。白壁小学校に転入し、翌大正四年卒業す。都留重人の家も近くで、母親同志は友人であった。

### 中学時代

大正四年四月愛知県立第一中学校に入學し、日比野校長のもとで鍛練されて、虚弱な体がその頃から見違える様になる。恩師に石田貞吉先生、尾崎久弥先生、級友に大阪大学渡辺格司氏、愛知県立女子大学早川甚三氏水麩の加藤得之氏は、八高、東大と三校を通じての旧友である。他に南山大学の山根義雄氏、画家の小堀四郎氏、建築家員永直義氏等は画をかく仲間であった。現大阪女子大学々々長雄本時哉氏の実兄とは中学時代の親友であった。大正七年四年生の時「時の偉力」という論文を学林第八十五号によせている。大正九年一月に同じく学林第八十五号に「甚大の圧迫」という論文をよせている。（渡辺格司氏より）

### 八高東大時代

大正九年九月一日第八高等学校文科乙類に入學。二年生になって石井直三郎先生から新古今集の講義をきく。「私の仕事の緒は先生のそのお講義から繰り出された」と云つてよいであろう」と水麩（第二十三号）にかいてある。

生る。

### 東京時代

昭和十年四月、病氣を理由に依願退職する。昭和十一年一月長女亮子誕生、七月、佐々木信綱博士の御好意によって、京都人文書院から「新古今時代」を出版する。同じ頃、藤村博士のお世話で東京音楽学校講師になる。昭和十三年七月に音楽学校教授に復活するまでの三年間の浪人生活の間、三五会員をはじめ、在京の方々種々のお世話をうけた。

### 長野女専時代

昭和七年七月大松春子（明治四十三年生）と結婚し、長野県女子専門学校に転任する。

前年より父は軽い脳溢血にかかり、昭和八年二月長野市箱清水に於いて亡くなる。京都市黒谷に葬る。

翌九年一周忌法要に京都に行き、帰宅後中耳炎になる。二月十一日入院、再度の大手術をする。九死に一生を得て三ヶ月後に退院したが、その年通動することがや々と静養に過ごす。九年の一月三日に長男融

### 大阪女専時代

大正十四年、父は横浜火災保険支配人を引退する。京都市赤坂区台町七十七番地に両親と共に引うつる。十五年三月卒業する。同期生は後年三五会として活躍される池田龜鑑・塩田良平・窪田敏夫・森本治吉・吉田澄夫・倉野憲之・西下経一・早川甚三・藤川忠治・松浦貞俊・阪口玄章・中島唯一氏である。

昭和二年四月学友石田武氏と共に、大阪府女子専門学校教授として赴任する。女専

大正十二年四月東京帝国大学文学部国文学科入学。東大YMCAのメンバーになって、寄宿生活をする。その頃のメンバーに気象学の山岡保氏があった。

大正十四年に石井先生を中心に、見山信一・安部忠三・幸節静彦・清水勤二・加藤得之・山崎敏夫氏と歌誌「青樹」を出す。昭和七年頃から歌は作らなくなったが、終生交るぬ学友は皆この頃の友人である。名古屋大学の江口彰次氏、大阪大学の森河敏夫氏、神戸大学の加藤一郎氏等、八高東大を通じての友人は学者畑に多かった様である。

大正十四年、父は横浜火災保険支配人を引退する。京都市赤坂区台町七十七番地に両親と共に引うつる。十五年三月卒業する。同期生は後年三五

会として活躍される池田龜鑑・塩田良平・窪田敏夫・森本治吉・吉田澄夫・倉野憲之・西下経一・早川甚三・藤川忠治・松浦貞俊・阪口玄章・中島唯一氏である。

### 大阪女専時代

昭和二年四月学友石田武氏と共に、大阪府女子専門学校教授として赴任する。女専

の会合が多かった。

その他日本文学研究第一・二号を出した、近藤氏等のグループ・三五会、古典談話会、加藤将之・平井昌夫氏・豊川昇氏等八高グループの鼎談会、白澤派の長与善郎氏邸での源氏物語講読会、現国会図書館員の岩淵兵七郎氏等の会があった。そのほかに音楽家とのつき合い等、酔うと、省線電車で朝までぐるぐる廻っていた。昭和十六年十二月次女敦子誕生、翌十七年十二月に養母逝く。昭和十九年大東亜戦争はげしくなり物資乏しくなる頃、清水高等商船学校に転じた。その時、西郷信綱氏を九州より清水に招く。

昭和十九年四月、二男敏静岡原郡袖師村に生れる。

#### 北京時代

昭和十九年九月一日、大東亜省海外派遣教員となる。北京輔仁大学日本語文学系教授として九月二十八日北京着。奥野信太郎夫妻と上海に行く阿部知二氏と同行。北京市徳勝門大街羊房胡同二十六号、輔仁公館に、一家六人住む。主席教授は現南山大学の細井次郎氏であった。

#### 北海道大学時代

昭和二十二年八月十一日、久松先生の推薦をうけて北海道大学に赴任する。灰色の街並に驚く。北海道大学の構内の美しい明治のにおいに、かぎりない愛着を感じる。札幌の内どこにも行かないことに覚悟し、とうとう十一年間を構内官舎に住む。北十一条西五丁目通称外人官舎、初代総長官舎である。

法文学部期成会後援会等を結成し、二十万円の現地募金にはりまわる。なれない土地と不適な仕事と、吹雪にさいなまれて帰宅した時の何よりの相手は、予科長宇野親美氏であった。官舎も、はじめ予科長官舎であったのに、好意で二階にむかえられ、後に文学部に移管されたものである。宇野氏は「雷親父」と予科生に尊称を受けていた人で、その家の二階に又雷が発生した観があった、談論風発深夜に及んだ。予科廃止と共に、その蔵書は国文研究室に移管されたのは、幸であった。

武田泰淳氏、高橋義孝氏等、最初の北大退出がある。

二十三年杉浦正一郎氏助教として単身

昭和二十年八月、北京で奥野氏と共に敗戦を迎えた。それ以後来る日も不安と不明と倦怠とに明けくれ、北京の市街は日タインフルがひどくなり、日本人は旧兵舎に集結して先を争って帰国をいそいだ。

その時はじめて、勤めから解放されて自由な時間に恵まれた。北京に持参した廿一代集の作者別カードの整理に、没頭し心魂を傾けた。翌廿一年四月七日に帰国するまでに完成し、輔仁大学に整理ノート及びカードを寄託した。

出発の朝、日本語科の学生がひそかに別れをつげに来てくれた。二年間一家のために手伝ってくれた周媽（まご）も再見。

#### 戦後の生活

昭和二十一年四月二十九日佐世保上陸。高槻市桜ヶ丘六五、瀬成田方に寄寓する。単身上京して。藤村先生、久松先生をはじめ、塩田、近藤氏等のお世話になる。昭森社の森谷均氏ははじめて上京して来意を告げた時、「え！足があるかア」と風巻の生還を驚かされた。近藤忠義氏の好意で早速、法政大学の講師となる。

その後七月に、森谷氏の好意で軽井沢千

ヶ滝五五〇の別邸に寄寓する。後、阿部知二氏の別邸に移り、帰国後はじめて一家を持つことが出来た。

浅間山麓のこの生活では、四五丁上手に時枝誠記氏が住み、一カ月の何日間かを千ヶ滝と東京に別けて、二人ともリュックを背負っていききました。千ヶ滝に住んだのはじめの二十日間に書いたのが、戦後最初のもので「西行」(版建設社)である。

九月二十五日の日記に、「西尾実氏からバケツ、魚焼食器洗い等ももらう。汽車のデッキに立ちつくして軽井沢の山まで持ち帰る」とあり、その御好意は終生忘れ得ない思い出である。その他、江口彰次氏から茶器、今は亡き堀誠氏からも茶器等、蒲団丹前、米、味噌にいたるまで数多くの方々の援助をうけた。

音楽学校 火、水

日本大学 木

鎌倉大学 月、金 二、二〇〇円

清泉女子大学 土

二松学舎 火の午後

これが昭和二十二年北海道大学に赴任するまで講師勤務先とその収入である。数多くの方々の好意の賜物であった。

#### 赴任される。

二十五年二月九州大学から招聘される。高木市之助先生小島吉雄氏等の御好意によるものである。

教授会の留任運動にまけて、とうとう九大行きを断念する。

九月に杉浦助教九大転任のことが決り、九大転任にからむ問題やつと解決する。

野田寿雄氏、五十嵐三郎氏、新聞進一氏、藤岡忠美氏等次々に着任されて他科の人選難のうちで国文科は人選揃う。

二十六年最初の眼底出血と高血圧に気づく。それ以後病勢一進一退。

二十七年慶応大学より招聘される。折口先生、奥野信太郎氏、池田弥三郎氏等の御好意によるものであった。この時も慶応と北大と学部長同志ゆずらず学長の認可がなくて、とうとう断念することにした。後々までも残念であった。周回を考え自分の本心のままに行動するのをはばまれること、ますますつらくなり、その度毎に高血圧がつづいた。その後神戸大学、広島大学その他からのお話しは一切断って、学問専念を志すものの、雑事の累積にわけられて昭和三十

二年九月漸く北大国文学会十周年を祝う。

五月北大付属図書館長となり、九月、十一月と二度西下する。帰省後図書館協議会の席上狭心症をおこす。

三十二年は北大病院三階の病室で、十年にしてはじめて静かな夜のクリスマスマスの鐘の音をきく。

三十三年正月に、魚澄惣五郎氏から関西大学への招聘をうける。同じ頃、立命館大学より岡崎望久太郎氏の御好意ある招聘もうける。西郷信綱氏から東京の大学への転出の話も進む。窪田敏夫氏は金沢大学へ御自分の後釜にと申出られた。その他話しの進まないままのもの二三あった。いずれを選ぶべきかまよった。

#### 関西大学時代

四月十一日大阪着。関西大学に転任する。飯田正一氏の尽力で、吹田市千里山永楽園三八番地に居をかまえることができた。雑務から解放されて喜ぶ。宇佐美喜三八氏と秋の東大国文学会に出席する。二人とも子供の様にゆうべはうれしくてねられなかつたと笑っている。

三十四年六月「新古今時代」を主論文として関西大学に提出する。

十二月、文学博士の学位記を授与され

十二月二日、平林治徳氏の急逝におどろ

十二月「はと」にのつて、岩波の古典大系  
の山家集のための仕事に行く。せかさ  
れて仕事をすううちに、体の変調を意識した  
様である。入院さしてくれと云う。きき入  
られず、正月二十日まで滞在の予定を更  
更して、十二月二十七日一たん帰阪する。  
大阪駅ホームに下りた時歩行困難な様子で  
あったのに、正月五日の東京行特急券を買  
つて帰宅する。その夜十二時過ぎより狭心  
症をおこす。呼吸困難心臓の劇痛。後に、  
心筋梗塞であったことを知る。二十八日朝  
吹田市民病院入院。阪大より堂之前博士を  
むかえ診察をうける。森河敏夫氏、飯田正  
一氏、金子又兵衛氏、吉永登氏等かけつけ  
て下さる。

正月三日、朝の「こたま」で長男融東京  
にもどる。夕方飯田教授のお見舞をうけて  
春子病室の外で良好を伝えて室にもどる。  
「今度飯田先生が来られたら病室にお通し  
する様に、大学の今後のこと先生方とよく  
相談して、君一人ではない様に」その他、

原稿ことわりの電報三通。岩波の仕事の手  
配等しやべる。心筋梗塞のあと一週間絶対  
安静と注意したことの、一週間目であるこ  
と数えていたものらしく「よくこんなに早  
く手配してくれた」と喜ぶ。回復を信じて  
いた。  
四日六時、朝の薬を自分でのむ。  
一瞬間が変る。――(五十七才)

御多忙の中を数多の方々から論文及追悼文をおよせ  
頂きまして、厚く御礼申し上げます。風巻の年譜は角  
川から出版される(文学史の方法)にも記載されま  
すので、この追悼号は、生前の知遇を中心にして書  
きました。尊称を略し、順序不同、遺漏記憶違い等  
は御寛容願ひ上げます。  
(昭和三十五年十一月二日記)

### 風巻先生慰霊祭

風巻景次郎教授の慰霊祭は35年2月  
14日午後2時から、本学千里山第一学  
舎二〇三教室で執行された。開式に先  
立って、文学博士の学位記が霊前に供  
えられ、飯田教授の司会により、遺族  
・学生代表の献花、慰霊祭委員長上道  
文学部長・矢口学長・神宅理事長・学  
生代表多賀野洋子・北海道大学国文学  
会代表野田寿雄教授・友人代表塩田良  
平大正大学教授その他の弔電、故  
人の生前好んだ作曲家に因み、モーツ  
アルトの葬送音楽の演奏、同レクイエ  
ムの演奏の中に拜礼が行なわれて閉会  
となった。なお、3時半から第一会議  
室において、追悼座談会が行なわれ、  
同席の各氏により故人の追悼談がつけ  
つきと語られた。  
御参列いただいた方々並びに同祭の  
執行に御協力下さった方々に深く謝意  
を表するものである。

### 受贈誌

【国語国文学関係学会誌】	愛知学大	愛知立女子大	跡見学園	愛媛学大	大阪学大	大阪樟蔭女子大	大阪女子大	大阪水女子大	香川学大	香川女子大	関西学大	九州学大	同分校・文学研	京都女子大	京都府大	熊本学大	甲南女子大	神戶学大	同	国立国語研究所					
国語国文学報	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学					
8	3	3	6	7	7	11	10	10	10	21	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10					
11	6	6	8	8	8	13	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23					
佐賀学大	滋賀学大	成城学大	大正学大	中央学大	中世学大	天理学大	東京学大	同	東京女子大	東京学大	東京学大	東洋学大	名古屋学大	日本学大	日本学大	日本学大	日本学大	日本学大	日本学大	日本学大					
文学論集	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学	国語国文学					
2	4	4	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6					
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5					
立教学大	立命館学大	龍谷学大	併文学会	和歌文学会	早稲田学大	同・平文研	学燈社	日本書房	白楊社	初音書房	武蔵野文学会	明治書院	【一般紀要類】	愛知立女子大	跡見学園	大倉精神文化研	大阪外大	大阪学大	大阪電通短大	大阪府大	大谷学大	岡大法経短大	香川学大	金沢学大	
日本文学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学	国語学
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	
33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	

